〈書評〉

岩城卓二著『近世畿内・近国支配の構造』

（柏書房、二〇〇六年六月刊、A5版、四一九頁、六八〇〇円）

荒　武　賢　一　朗

一

本書は、日本近世史のなかで畿内近国支配を中心に、精力的な研究活動を展開する著者が初めて単著として成果をまとめた論文集である。まずは、目次を紹介しておこう。

序章　畿内・近国支配構造研究の課題
　　—非領国論・幕府領国論・支配国論が提起したもの—
第一部　軍事拠点大坂と譜代大名
　第一章　在坂役人と大坂町人社会
　　—大御番頭・大御番衆・加番を中心に—
　第二章　幕府畿内・近国支配における譜代大名の役割
　　—摂津国尼崎藩と和泉国岸和田藩を中心に—
　第三章　町奉行所広域支配と尼崎藩
　第四章　明和六年尼崎藩領上知考
　第五章　幕末期における尼崎藩の軍事的役割
第二部　広域支配と民衆
　第一章　畿内・近国の河川支配　—大和川堤防を中心に—
　第二章　大坂町奉行所と用達
　第三章　一橋家領の用達
　第四章　訴願と用達・郷宿
結語

書名にも掲げられている通り、序章では著者の大きな研究課題である近世の畿内近国支配に関する成果と課題を述べ、第一部では軍事に注目するという大義から、大坂とその近隣に位置する譜代大名の関係とその役割が、第二部には大坂地域の河川支配や、政治権力と民衆の媒介的存在であった用達や郷宿の研究が盛り込まれている。前者では支配構造の大枠をとらえ、後者においてはその内実において重要な存在となる「御用請負人」の実像を鋭く描き出すという、バランスのとれた構成になっている。

二

本書が提示した論点は、分厚い研究史との対比を含めて実に多彩であるが、評者の気づいた点を中心に概要をまとめておきたい。

序章は、これまでの研究について著者なりの評価が加えられ、本書の進むべき方向性が詳細に述べられている。研究史の流れについては、一九五〇年代以降、畿内・近国の支配構造について論じてきた安岡重明の「非領国論」、八木哲浩の「幕府領国論」、そして藪田貫の「支配国論」を中心に置き、それらとともに村田路人、水本邦彦、熊谷光子の所論を論者ごとに整理している。ここで著者は、安岡の非領国論以降、どのような形で研究が進められてきたのかを振り返り、研究の到達点を明確に位置づけようとする。それによっていくつかの重要な問題点を指摘するが、本書では地域内における譜代大名の存在、および幕府広域支配権の検討が不可欠だとし、先行研究の精査から、とりわけ八木の視角を高く評価した。また近年の研究動向については、豊かな歴史的事実が明らかにされる一方、新しい視角が提示できたかどうか疑問である旨を指摘する。文中の言葉を借りれば、「問題はなぜ、それを論じているのか」（二四頁）という本源的な問いかけが魅力的であり、「畿内・近国の論じ方」を追求しようとする著者のこだわりが理解できよう。そして、著者の目的を整理すると、次の大きな二点が注目できよう。まず一点目は、「幕藩体制における畿内の位置を考える」（二五頁）、第二には畿内を経済拠点として位置づけるだけでなく、軍事拠点としての畿内・近国、その中心に位置する大坂の把握を行うというものである。

第一部では、軍事拠点・大坂と周辺譜代大名の関係に力点を置いて論述が進められている。とくに軍事の観点から大坂、および周辺地域を分析する視角は、大変斬新な印象を持つ。これまでの大坂地域といえば、「天下の台所」と称され、経済都市、もしくは全国的な経済先進地帯の中核という語り方が一般的であったが、大坂城の軍事的機能、尼崎藩などをはじめとする周辺譜代大名領を視野に入れ、大坂町奉行所の広域支配を合わせた検討に力を注いでいる。これは広く史料収集・分析に携わってきた著者であるがゆえの成果であろう。

第一章では、軍事拠点とされる大坂在駐の幕府役人につき、その構成や役割が詳しく確認されている。そして、行政・裁判権に向けられがちであった先行研究に対し、大坂城守衛に関わる者たちが多数を占めていたことを論拠に、城代―町奉行系統以外の機構論を提示した。さらに、町人社会との関係性に着目し、大坂の都市史研究にも示唆を与える内容になっている。ただし、史料的制約という障害によってからか、時期の変遷に注意が払われておらず、その意味で引用史料の「ばらつき」も目立つ。

第二章は、畿内・近国研究のなかで軽視されていた譜代大名の軍事的役割に注目する。これは著者が「幕府領国論」の方向性に共鳴する姿勢とも重なり、「支配国論」が十分配慮しなかったとする課題でもある。具体的には摂津国尼崎藩、和泉国岸和田藩を素材として、それぞれが大坂防衛、および周辺地域の動静監察を行うという役割を持っていた事実を明らかにしている。

第三章は、大坂町奉行所の広域支配と尼崎藩との関係を、享保年間

から明和年間に至る時期を対象に分析を試みている。幕府（江戸）、大坂町奉行所から尼崎藩領に通達される触書・諸政策を丹念に追い、それは明和年間にひとつの転換期を迎えるとの重要な学説が述べられている。これは、畿内・近国に限らず、幕・藩の関係を如実に表すものであり、「幕藩体制」や全国的な幕府諸政策の展開を考えるうえでも有効な成果であろう。

第四章は、明和六年（一七六九）年二月に幕府が行った尼崎藩領海岸部の上知（幕府領化）について検討を加えたものである。この上知は、尼崎藩、西摂津地域、そして大坂を含む大きな衝撃を与えた事件であるものの、これまでその一連の動向や背景などを詳しく明らかにした研究はなかった。よって、政治的・社会的・経済的な研究成果へ結びつく基礎的な作業としても評価されよう。

第五章は、畿内・近国論の弱点ともいうべき、幕末期の軍事拠点大坂について検討を深め、当該期の尼崎藩の軍事的役割を具体的に分析したものである。そもそも大坂城守衛の役目を与えられていた尼崎藩は軍事の形骸化、明和上知による領地分断などにより、その軍事力は脆弱なものになっていた。そこに大阪湾海防問題が浮上するが、幕府は当初の尼崎藩を含めた畿内・近国諸藩による警衛から、長州など西国外様諸藩を加えた体制へと移行する。これは幕府の外圧への危機感、および畿内・近国守衛構想の転換という流れのなかで理解されるが、一方で幕末期に至って尼崎藩（および畿内・近国諸藩）が軍事的に地位を低下させていたという事実も浮上した。

第二部は「広域支配と民衆」と冠して、広域支配の問題と、「用達」・「郷宿」を中心とした政治権力と民衆の結節点を詳しく述べたものである。この課題が本書においてまとめられたことにより、大坂町奉行所の広域支配や、幕府の統治戦略、および畿内・近国における支配機構の実像などについて重要な論点が示された。

第一章は、河川支配を検討するなかで、大和川付け替え、および堤防の維持・管理に注目し、畿内・近国に対する幕府の基本方針を解明しようとした。その根幹には大坂治水を最優先課題と考える幕府があり、大坂とつながりを持つ河川は国役普請の対象、それ以外に幕府は主体的な施策を積極的に打ち出さないという論理がより明確となった。これによって幕府広域支配は支配国内を同一論理で位置づけていないという主張も強調される。

第二章は、一八世紀半ば以降、町奉行所・個別領主・民衆の三者をつなぐ役割を担う用達の存在と、基本的性格を明らかにした。その役割のなかで用達触の通達を詳しく解析し、また用達が権力、民衆の媒介的機能として不可欠な存在に成長する過程を論じている。

第三章は、畿内・近国の全般的な用達を取り上げた前章に対し、一橋家領における川口役所用達に焦点を絞り、とくに用達の持つ御用宿の機能を明らかにした。第二・第四章とも重ねて「大坂御役便録」や「大坂便用録」などの書物を紐解くことで、都市・周辺を問わず、この地域全体における用達の存在形態に迫る作業も重要であろう。

第四章は、民衆の訴願活動を支える用達・郷宿・下宿の姿をとらえ、村の都市拠点として利用される側面を明らかにしている。内容そのものについても緻密な分析が行われているが、とりわけ寛政年間の納宿廃止や幕府（大坂町奉行所）の諸政策を関係部分だけ抽出するのではなく、同時期の諸政策を分野の違いに関わらず取り上げ、時期性

を重視した手法は学ぶべきであろう。

全体としてまず評価されるべきは、畿内・近国の多様なあり方を新たに提示されたことである。幕府在坂役人における番方の存在を明確に位置づけたこと、あるいは権力と民衆をつなぐ存在（用達・郷宿）が地域運営を円滑に行ううえで重要視されたことなどは畿内・近国研究のなかでも画期的であった。いずれもその存在は早くから明らかになっていたものであるが、著者の精力的な史料収集・分析によって精緻な実証が行われたものといえよう。また自説を裏付ける素材となった史料も幅広いもので、領主、村方、あるいは出版物などに至る多彩な要素が盛り込まれていることも重要であろう。

先行研究との関わりについては後述するとして、大坂周辺の譜代大名領への注目も成果のひとつに挙げられる。今から三〇年ほど前に発表された、秀村選三・桑波田興・藤井譲治「藩政の成立」（『岩波講座日本歴史10　近世2』一九七五年）には、「非領国における藩領では摂・河・泉を本国とする藩がきわめて少なく、多くは遠国諸藩の飛地であり、そのため藩政史の研究それ自体としてはあまり研究されていない」とある。本書は藩政史研究ではないが、大坂との関係を視野に入れながら大名領に関する分析を深められ、また諸政策の通達などにおいて幕・藩関係を見通した作業は、長年の課題に踏み込んだものとして、広く受け入れられるものであろう。

新鮮味のある課題として、畿内・近国論のなかでの大坂に着目された点は興味深いもので、全体のなかで随所にその成果と可能性がみえた。用達・郷宿研究の成熟ともつながるが、村の拠点としての大坂、また先述の大坂城守衛に絡んだ尼崎・岸和田両藩の存在など、畿内・近国地域と大坂の関係をこれまでとは異なる観点で明らかにした意義は大きい。そのなかのひとつに大坂蔵屋敷の存在がある。成果として、①蔵屋敷を利用しての大名家同士の情報交換、②尼崎・岸和田両藩の蔵屋敷が特別な存在であったこと、③蔵屋敷の存在とその役割は支配国という枠組みでは説明できないこと、などがあった。評者も自身の史料分析において、幕末期に信濃国松代・真田家が大坂に御用場を設置する際、大坂町奉行所与力との交渉がうまく運ばず、その仲裁に紀州徳川家と大和郡山・柳沢家の大坂蔵屋敷が関わった事実に接した。本書が述べるように、蔵屋敷は経済的機能だけでなく、少なくとも幕末期には政治的活動をも担っていたことは揺るぎない事実として強調されるべきである。また、著者も注目された伊勢国津・藤堂家の大坂における役割も見逃せない。近世初期における大坂の都市形成にも深く関わっただけでなく、幕末に起こった天誅組の乱で、主謀者を匿う萩・毛利家の大坂蔵屋敷へ最初に捜査の手を伸ばしたのも藤堂家であった。本書で主張されるように、支配国の枠組みでは到底解明できないことであるが、同時に畿内・近国論にとどまらない研究の深さがみえたようにも感じる。

三

本書は多様な畿内・近国論について有益な成果が存分に含まれた内容で、今後の近世史研究にも寄与する重要な主張が行われた。ただし、今後の展開のなかで気になる事柄もいくつか得たように思う。

豊富な研究蓄積を有する畿内・近国研究のなかで、安岡の非領国論

とは異なる方法論の提起を模索された点について敬意を表したい。しかし、著者の述べた学説の展開と、研究史の追究してきた諸課題に「隙間」があるのではないだろうか。畿内・近国をどのように考えるか、という大きな目標と、個別の分析手法に矛盾があるように感じる。換言すれば、著者の精緻な仕事の数々は、非領国論・幕府領国論・支配国論の批判を行うのに適当なのか（ほかの研究との結びつけも可能であるとの積極的な意味を含む）、という疑問である。序章における個別の研究史整理は、著者なりの評価を加え、論者ごとの成果と課題を浮き彫りにしたが、全体の流れと自身の取り組むべき課題についての切り結びが十分ではないように思われる。畿内・近国研究という目標に向かって研究手法や関心（論者ごとの「目の付け所」）が違うことに疑問を持ち、不足する論点の拡充を狙う意図は理解できる。だが、諸氏の成果と課題を統合するのではなく、論者ごとに評価を加える形式には抵抗感を覚える。図1「畿内・近国支配構造研究の構成」（一四頁）では、非領国論の成果から「A畿内・近国の位置づけ」「B所領」「C幕府広域支配」「D個別領主支配」「E村・民衆」という五つの要素を整理され、安岡以降の研究者がどの課題に挑んできたかを著者なりに詳しく分析している。結果、八木が示唆した地域内における譜代大名領分析、軍事拠点という課題を抽出したが、その他の論者に対しては、藪田の支配国論をはじめ、著者自身の手法と異なるからという一点での批判に終始する。それが顕著に表れるのは、水本邦彦の所論で「水本の議論は、安岡以来の議論と同一線上に位置づけてはいけない（中略）切り込み方が全く異なるからである」（二一頁）との一文であろう。たしかにそうかもしれないが、課題への接近方法が論者ごとに相違するのは当然であり、安岡の系譜とつながるかどうかに束縛されることは、著者が語る「安岡の方法論を乗り越える」段階への道筋を閉ざしてしまう。

先に示した図1の構成に沿って、本書に評価を与えるならば、五つの要素すべてに接近をして、それぞれの研究の進展に貢献をしたことになる。これは率直に評価されるべきであるが、自認される「問題はなぜ、それを論じているのか」という問いかけにはどのように答えられるであろうか。村田や熊谷などに対して、その精緻な実証研究を評価しながらも、「どのような畿内・近国支配構造研究を構想しているのか不明である」との意見を述べているが、一方で著者の根底に流れる問題意識とはなにか。おそらく、五つの要素から出発することによって、そして過剰に支配国論を意識するあまり、著者の畿内・近国研究へのこだわりが薄くなっているように思う。畿内・近国を取り上げるから、という単純な意図ではないことを承知しているつもりであるが、「幕藩体制における畿内の位置を考える」を提唱することと、朝尾直弘の「畿内における幕藩体制」（『朝尾直弘著作集第一巻』岩波書店、二〇〇三年）などとの関係、もしくは相違点なども是非知りたいところである。そのあたりが明確にならないと、村田や熊谷と同じような評価が下されても仕方ない。本書において展開された貴重な仕事を非領国論・支配国論批判に固執することなく、もう少し幅を広げた範囲のなかで議論すべきではないかと提言したい。

次いで、個別的な論点把握になってしまうが、いくつか些細な指摘をしておきたい。まず、本書の独自性とも言っても良い「軍事拠点・大坂」論についてである。第一部では大坂町奉行所が担う支配国に対

する広域支配とは、軍事・経済拠点としての大坂を維持することが主目的であったと述べてあるので、「軍事・経済拠点としての大坂」論との表現がより適切かもしれない。軍事拠点であるという評価については先述した通り、有益な議論をもたらしたが、この軍事の分析対象となる時期には疑問が残る。著者が朝尾直弘などの研究に示唆を受けたとする近世初頭の幕府構想と、流動的な政局のなかで混沌とする幕末期は果たして同一視できるのであろうか。そのような疑問は、「幕藩体制における畿内の位置を考える」という著者の主張からすれば、時期、段階の議論を詰める余地は十分にある。軍事拠点と位置づけるにあたって、留意すべきは当然政治史との連関性であり、その点近世前期における認識には若干の言及があるものの、いわゆる政治動向と本書の接点・距離について明言はない。また、政治史研究の厚い幕末期に至っては無関心を装っているように見受けられる。第一部第五章がまさにその幕末期の分析に相当するが、膨大な中央政治史と向き合う必要はないにせよ、例えば宮地正人が示唆する京都大坂政権の意味合い（「歴史学をどう学ぶか―幕末維新期研究を手がかりに―」『歴史科学』一六五、二〇〇一年）などは、本書の目指す「畿内・近国の論じ方」に直結するのではないだろうか。軍事的見地からしても、近世前期は京都、大坂それぞれを別に議論することも可能かもしれないが、幕末期における幕府からみた京都は、それ以前の時期とは比べものにならないほど重要な政治都市に位置づけられている。さらに付言すれば、幕末期の京都・大坂（および伏見）は一体として考えるべきである。本書で扱われた大坂湾海防などはその典型で、大坂単独の問題ではなく、京坂の有事なのである。「（著者が）無関心を装っている」と表現したが、本書は支配国論にはない軍事という道具を手に入れたことによって、近世後期までの畿内・近国論を補完することが可能になった反面、軍事についての地域的拡大が現実のものになった幕末期を説明できなくなってしまった。これは勝手な解釈かもしれないが、第二部第四章で披露されたように「時期にこだわった分析」を軍事・政治論においても踏まえられるべきあろう。

大坂周辺の譜代大名への着目は、新たな畿内・近国論を構築するうえで重要な視座であったと考えられ、そのうえで尼崎・岸和田両藩を中心に、その軍事的役割が議論の中心に据えられた。もちろん両藩、とくに尼崎藩については軍事のみならず、広域支配や経済の諸問題を見つめるうえでも詳細な分析結果が導き出されたが、なぜ尼崎や岸和田に着目したのであろうか。大坂城守衛の役割が強調されるが、京都を含めた畿内・近国論で考えた場合、それだけでは不十分ではないか。この疑問も対象とされる時期が不明なことに起因する。本論では細かく触れられなかったが、これまで畿内の守衛を広域的にとらえた場合、重要とされてきたのは近江国彦根、播磨国姫路ではなかったか。彦根には井伊家、姫路には池田家のあと、本多・松平・榊原・酒井家といった譜代の重鎮が、尼崎や岸和田よりも大きな所領を与えられ、有事の際の備えとされていたように思う。

一方、経済拠点・大坂について、著者の想定は佐々木潤之介（『幕藩権力の基礎構造』御茶の水書房、一九六四年）の学説に依拠しているようである。本書にとって軍事への注目が大看板であり、経済が後景に退くというのは理解できるが、明和年間の尼崎藩領上知にも触れられているので全く自説が展開されないというのも読み手としては困

惑する。政治的には享保の国分けによって大坂・京都の位置づけが変更され、これは経済的にも大きな影響を与えたはずである。その意味では、享保年間あたりを分水嶺とする近世前期・後期の経済的動向は、軍事拠点を語るにおいても看過できない。とくに、後期には大坂の市場的地位低下、西摂の経済的成長など、この地域のおかれている経済状況は常に躍動している。これらとの関わりに言及されることは決して無駄ではない。

軍事・経済の接点を考えることも重要であろう。素材は決して多くないが、例えば米穀の問題はひとつの示唆を与えてくれる。本書でも部分的に兵粮米・城詰米に関して触れる記述があるが、畿内幕領における年貢米の江戸廻米も注目すべき課題ではないだろうか。当然、藩領では存在しえない事柄ではあるものの、大坂城守衛を考える（幕藩体制、幕府政策を考えることにも派生する）ならば、なぜ畿内の幕領村々から江戸浅草御蔵へ年貢米が廻送されるのかという単純な事実を無視できない。畿内・近国から米穀が江戸へ流れること、もしくは大坂・二条に備蓄されることなど、軍事・経済、加えて政策の問題を総合的に読み解く指針になろうかと思う。

四

評者が日本近世史研究を志そうとしたとき、ちょうど著者の用達に関する論考が次々と発表された。研究の「け」の字も覚束ない者にとっては、研究の意義や背景など全く理解できず、書かれている内容をただ目で追うばかりであったが、本書が刊行され改めて読み直してみると、本当に多くの論点が導き出されていることに、今更ながら感服するばかりである。

著者の用達研究は、村田路人の「用聞」論とも重なり、近世畿内近国論、および近世地域社会論に対して大きな衝撃を与え、それ以降、ひとつの流れとして現在の通説的位置を獲得するに至った。その後、第一部の中核をなす軍事拠点、譜代大名に注目した研究へと展開され、第二部と合わせて、畿内・近国論として立ち向かう基盤を作られたように受け取っている。これは先行研究の丹念な読み込み、そこから得られる個性的な洞察力、また群を抜く史料調査によって支えられているのだと思う。本書は著者にとっての終着点ではなく、出発点だと勝手に解釈しているが、本稿がこれから取り組まれる研究に微細ながら役立てば幸いである。

（日本学術振興会特別研究員）